

幼児の教育



家庭-保育所-幼稚園

1998
4



子どもの世界が見えてくる
児童精神科医30年の育児相談を通して語る子どもの真の姿

そっと観る子どもの情景

◆好評発売中◆



親や大人は子どもの遊びの意味を取り違えがちです。真の子どもの内側の意味がわからないと、いろいろな問題を解決できません。こうした事例22話を取り上げ、育児相談30年のベテラン児童精神科医が子どもの問題を解明してくれます。

石島徳太郎・著

B6判・200頁・定価：本体1,800円+税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第97巻 第4号



幼児の教育 目次

——第九十七卷 第四号——

© 1998
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

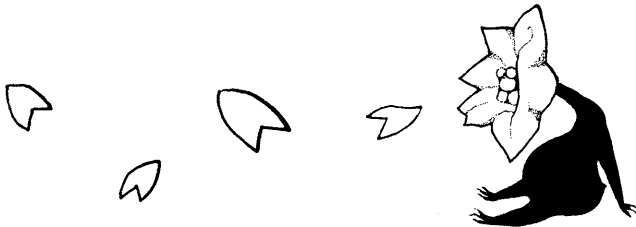
子どもの生活と音楽(1)「数かぞえ」のバリエーション……………藤田芙美子…(6)

子育ての心理(1)

現代家庭における文化継承機能の衰退……………楡木 満生…(16)

子どもにとっての仲間の意味について考える……………中島 寿子…(23)

大人の保育と子どもの保育……………津守 真…(32)



滄桑の街・香港から⑤ 元気の素……………今井 七重…(36)

ある日の育児日記から⑧……………佐藤 和代…(41)

小さな体験から……………榎田 正子…(42)

保育者の眼差し……………担任という視線……………矢萩 恭子…(48)

保育の本から 『保育者の地平』を読んで……………松沢 孝博…(58)

表紙絵／佐藤 寛子

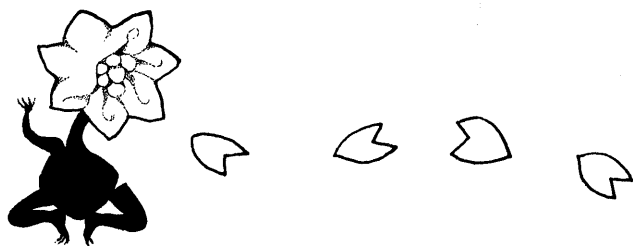
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・上坂元絵里・吉岡 晶子

編集部／仲 明子



ある日

撮影・平野 清



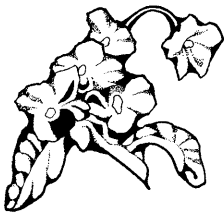


るのではないか、子ども中心の音楽教育の可能性についてヒントを得られるのではないかと考えたからです。

子どもたちと音楽活動をはじめるとあって、私は次のような指導の原則を自らに課すことになりました。子どもたちが自主的に関わるような環境や音楽を考えて用意するが、もし、子どもたちが関心を示さない場合はその計画を直ちに取り下げようというものです。しかし、子どもたちとの活動をはじめると間もなく、私が用意する音楽や音楽活動のほとんどは取り下げざるを得なくなりました。私が考えていた音楽や活動は、子どもたちと十分に気持ちを通わすものでないことが、どうしようもなく明らかになったからです。私は指導する以前にもっと子どもの音楽の仕方を知らなくてはならないと考えるようになり、指導を取り止めて、子どもたちと日常生活を共にする中で子ど

もたちの音楽の仕方を注意深く観察することになりました。観察を進めるうちに、子どもたちがお互いに気持ちを通わせて音楽的な表現を楽しんでいるのは、音楽の指導を受けている場面よりもむしろ指導を受けていない自由な活動場面であることが次第に明らかになってきました。自由な生活場面子どもたちは誰もが皆、生き生きと音楽、つくりを楽しみ工夫していました。

私は子どもたちが音楽する本来の姿をもっと確実にとらえたいと考えるようになり、以来、十数年にわたって、保育園、幼稚園の子どもの音楽性とその育ちを、社会人類学的な視点で観察する研究をおこなってききましたが、子どもの音楽活動をでき



るだけ子どもの側に立って観察するこの研究は、子どもが周囲の人々と関わって自ら音楽を学び、演じている実際、すなわち、日本の子どもたちが日本の文化社会の中で何を音楽的に学んでいるかの実際を明らかにしてきました。^{注1}

本稿では、この観察研究から、子どもたちの音楽行動のいくつかの実例を取り上げて、子どもたちが日常の生活の中で、どのように音楽的なものを学び、子ども社会の中で用いているのかについて具体的に説明したいと思います。

まずはじめに、日本の文化の内側に育つ子どもたちの音楽行動に一貫して認められる、音響を組織づけるための一定の方式があることについて述べましょう。

子どもの音楽づくりの基礎

私は、人は生まれると間もなく外界にある音響

を受け入れるようになり、次第にその音響を自ら組織づける方法を身につけるようになる、この音響を組織づける方法こそ人々の音楽づくりの基礎になるのだと考えています。^{注2} まず、話し言葉はどのようにして学ばれ、歌うこともまた話し言葉と深く関わって学ばれています。

子どもたちの音楽行動を注意深く見てみると、子どもたちは日本語の話し言葉を獲得すると同時に言葉の音響面をまとめてリズム・カルに唱えたり歌ったりすることを学び、さまざまに工夫し変化させていることに気がつきます。子どもが「数を唱える」実例をとりあげて説明しましょう。日本語の文化圏に住む子どもは、早ければ一歳から「いーち・にーい・さーん・しーい」のように数かぞえをするようになりますが、この数かぞえの音響面を今少し注意してみますと、子どもたちは、通常「いーち」をひと呼吸で発声し、この

ひと呼吸の時間単位を「い」と「ち」二つの音節

によって二等分し、拍節的に、そしてほぼ長二度の音程で唱えていることがわかります。私は、保育園の子どもたちの数かぞえが、年齢を増すにしたがって音楽的によいような変化を見せるかについて調べたことがあります。子どもたちは周囲の人々とさまざまな場面でのやりとりの中で数かぞえをする経験を重ねるにしたがって、数えることができる数の量を増すだけでなく呼吸配分の妙技を身につけ音響的にバランスのとれた見事な唱え言葉を作り出していることを知りました。子どもたちだけでなく私たち大人もまた基本的にはこのような日常生活の中でのやりとりを通して音楽的なもの、すなわち、音響を美しく心地よく組織づける方法を自ら学び、工夫しているのです。このように楽譜を用いることのない音楽の学習法を、ここでは仮に音楽の「直感的学習」と呼ぶこ

とにしましょう。

日常生活の中で使われている「数かぞえ」

子どもたちは、「数かぞえ」に見られるように、呼吸を整え、日本語の単語や音節のまとまりに従って言葉をリズムミカルに唱える方法を日々学んでいます。同時に、このようなリズムミカルな唱え言葉や唱え歌を子ども社会の中でさまざまな形で使い、機能させることも学んでいます。「数かぞえ」を異なった生活場面できざまに使いこなしている子どもたちの活動例^{注3}をとりあげて、子どもたちの心の動きを追って見ましよう。



一歳児の数かぞえ（ブランコに乗って）

一九九四年五月十六日 かなな 一歳七カ月

彩香 一歳六カ月

さわやかな五月の朝、一歳児クラスの子どもたちは、近くの公園に散歩に出かけました。かななちゃん、彩香ちゃん他三人の子どもたちは日当りのよいコーナーにある、四人乗りのブランコに乗りました。保育者が「ふうらん、ふうらん」と唱えながら、ゆっくりとブランコを押すと、ブランコの上のかななちゃん、彩香ちゃんも「ふうらん」「ふうらん」とつぶやいています。ブランコの上の子どもたちは、暖かい日差しを浴び、ブランコの動きに身をゆだねて心地よさそうな表情です。

保育者が、かななちゃんの座席の後ろにまわってブランコをゆっくり押しながら「いち・に・い・さーん・しーい・ごーお・ろーく・しーち・

はーち・きゆう・じゆう」と数をかぞえます。かななちゃんと彩香ちゃんが「さーん」から、保育者と声を合わせて唱えはじめます。かななちゃんは拍節ごとに頭を前に振りながら唱えています。

続けて保育者が「おまけの・おまけの・きしゃぼっ・ぼー・ぼーと・なつたら・かわりましょ、ポッ・ポー」とリズムカルに歌うと、かななちゃんが「きしゃぼっぼー」の「ぼっぼー」から歌いはじめますが、まだ口がうまくまわりません。それでも最後の「ぼっぼー」は、しっかりとリズムにのって歌いました。

彩香ちゃんは、ブランコの真ん中の支柱にハマって、かななちゃんと、その背後でブランコを押している保育者と顔を見合わせて立っていました。保育者とかななちゃんが三回目の「おまけの・おまけの」を歌いだすと、保育者と顔を見合せ、歌の拍節に合わせて保育者の身振りと反対方

向に身体を左右に振りました。そして、かなちゃん、歌の最後のフレーズ「ぼっぼー」を、見事なタイミングで今度は一人で歌いました。保育者とかんなちゃんと彩香ちゃんは、声を合わせて数を唱えるという行為を通して、お互いに音楽的な時間を作り出すことを楽しんでいました。

☆まだ言葉の数の少ない一歳児。唱え言葉や唱え歌の言葉の意味は理解していませんが、お互いの呼吸周期を合わせ、言葉の音響面をまとめ、動作をまとめて拍節的に唱えることの心地良さを楽しんでいます。

三歳児の数かぞえ（消毒薬に浸かって）

一九九一年六月二十三日 直樹 三歳四ヵ月他
子どもたちは、プールに入る前に消毒薬が入った、たらいに腰まで浸かって数を十までひと息で唱えます。まだ数をしっかり覚えていない子ども

が多く、呼吸コントロールがうまくできないので、数を飛ばして唱える子どももいます。直樹くんは「いち、にい、さん、しい、ごくお、ろく、しち、はち、きゅっ、じゅ」と数えて、たらいから飛び出しました。途中、息が足りなくなつて「ご」と「お」の間で息継ぎをしました。この息継ぎは拍節の途中なので、音響的にはバランスをくずして不安定なものになりました。

☆子どもたちは消毒薬に一定時間浸かっていなければならぬという不快さを数かぞえをすることに
よって発散して
います。



四歳児の数かぞえ（かくれんぼ）

一九九二年八月三十一日 直樹 四歳六ヵ月

かくれんぼで、直樹くんは「おに」になり、椅子に座って、ハンカチを畳んだり広げたりしながら数を数えています。一から十一までは、ほぼ二度の音程間隔をもつ二音旋律で、一定のテンポを保って唱えています。十一を数え終わった時、「見てる、見てる」という女児の叫ぶ声が聞えてくると、キツとした表情になり、そのあとは一から二十七までをいくつかの数を飛ばして急テンポで数えあげます。隠れている子どもたちを早く見つけに行きたいという、いらいらした気持ちをあらわに表現しています。そこに「もういいよ」の声がかかり、直樹くんは素早く椅子から立ち上がって隠れている子どもたちを見つめるために走り出します。

☆「おに」は一定の時間、すなわち、他の子

どもたちが隠れるまでは目をつぶって他の子どもたちに聞こえるように大きな声で数を数えなければならぬという、子ども社会のルールを理解した数かぞえです。

＜ブランコの順番をまって＞

一九九二年八月三十一日 雅道 四歳六ヵ月

雅道くんは、ひさちゃんが乗っているブランコに早く乗りたくて仕方がありません。しかし、ひさちゃんのブランコ乗りは終わりそうにありません。雅道くんは、ブランコの支柱に寄りかかって、ひさちゃんに向かって歌いはじめました。

「いーち・にーい・さーん・よーん・ごーお・ろーく・しーち・はーち・きゅっ・じゅっ・おまけの・おまけの・きしゃぼっ・ぼー・ぼーと・なったら・かわりま・しょ」「ポッ・ポーで・おーし・まい」

☆この歌は、ブランコやトランポリンなどの

遊具で遊んでいる時に、順番を待っている子どもが交代を促す歌として保育園の生活の中で機能しています。子ども社会のルールを示す象徴的な役割を果たしています。

〈体操のかけ声〉

一九九二年八月三十日

「いちに・さんし・ごおろく・しちはち……」足を前に出して座り、爪先に両手を延ばして屈伸体操。

☆「数かぞえ」の拍節にのせて、身体運動をまとめています。

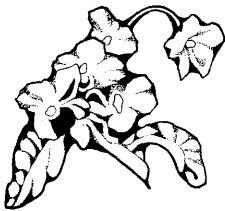
五歳児の数かぞえ（プール際で甲羅干しをしながら）

一九九二年七月二十七日 佳裕 四歳十ヵ月 （けいすけ）

プール遊びの中休み、子どもたちは、プール際に敷いたシートの上につぶせになって、それぞれに甲羅干しを楽しんでいます。保育者に百数えるまで日なたぼっこをするようにと言われて、子

どもたちはのんびりと声を合わせて数かぞえをしています。「いち、にーい、さーん……」。佳裕くんもまたみんなと一緒に大きな声で数えています。したが、「しち」になったところで「しち、はち、くう、じゅう」と、一語ずつ語尾をあげて、早口で一気に唱えました。次に、ちょっと考えたあと、ひと呼吸遅れて「ワン、ツウ、スリー、フォウ、……テン」と、これも早口で、見事な英語の発音で唱えました。はじめの数かぞえて、イントネーションを変えてみたことから、英語の数かぞえを思いついたようです。そしてさらに、今度はCMソングの「セブン・イレブン・いい気分」を連想して歌いました。

☆子どもは言葉遊



びの名人です。言葉の音響面をとらえてさまざまな発展を工夫しています。この場面の「数かぞえ」は、ある行動を一定時間続けるという約束ごととしても機能しています。

このように、子どもたちは既に一歳から、数を唱えることを学びはじめ、お互いの、あるいは自身の唱え方が心地良いものになるように、バランスのとれた美しい音響構成を作り出そうとしています。そして次に、このようにして自ら学習した数かぞえを、今度は生活の中でさまざまに使います。年齢を増すにしたがって、その使い方は多様化します。四歳、五歳になりますと、数かぞえは身体運動をまとめたり、一定の時間単位を示すといった象徴的な役割を果たすために、そしてお互いの気持ちをコミュニケーションするため、さまざまなあり方で使い込まれるようになります。

子どもの音楽行動を二つの側面から考察してきました。一つは、子どもは言葉を獲得すると同時に、言葉の音響面を拍節的に旋律的にまとめる基礎的な形式（音楽的表現形式）を学んでいるという内的な側面です。いま一つは、この音楽的表現形式によって作り出される定型化された唱え言葉や唱え歌を社会のあらゆる場面で用いることを学んでいる、という外的な側面です。子どもたちにとって数を唱えるという行為は、基本的には自己の情動を解放する、あるいは、コントロールする手段であり、子ども社会の中では、楽しみ、コミュニケーション、美的創造、集団行動のルール、象徴^{注4}といったさまざまな役割（機能）を果たしていることがわかります。

（国立音楽大学）

注

1 Fumiko Fujita, *Problems of Language,*

Culture and the Appropriateness of Musical

Expression in Japanese Children's

Performance, Tokyo: Academia Music. 参照

藤田美美子「幼稚園における様式化された話し

言葉」他『日本保育学会大会研究論文集』一九八

八—一九七年、参照

2 See, Fumiko Fujita, *op. cit.*

この考え方は、英国の民族音楽学者、J・ブラ

ッキングの「音楽は人間によって組織づけられた

音響である」という音楽のとらえ方に基づいて、筆

者が日本の子どもたちの音楽行動を観察した結果

得たものです。John Blacking, *How musical is*

man? University of Washington Press, 1973.

(徳丸 吉彦訳『人間の音楽性』岩波現代選書

一九七八年) 参照

3 東京都東大和市にある、こひつじ保育園の子ども

たちの活動例です。筆者と国立音楽大学卒業研究

グループは、一九九一年から現在まで七年間にわ

たって、この保育園の子どもたちの音楽行動の観

察研究をおこなっています。

4 米国の民族音楽学者、A・メリアムは、音楽が人

間社会において果たしている役割(効用)を、情

緒表現、審美的享受、娯楽、伝達など、十の機能

としてまとめている。A. P. Merriam: *The*

Anthropology of Music, Northwestern

University Press 1964. (藤井知昭ほか訳『音楽人

類学』音楽之友社、一九八〇年) 参照

現代家庭における 文化継承機能の衰退

楡木 満生

家庭にはいろいろな機能がある。例えば、外出から帰ってくると気持ちがあつとするのは、精神安定機能が家庭にあるからである。しかし、家庭にはそれよりもっと重要な機能がある。つまり、生まれた子ども達を文明社会の中で一人前に生活できる人間に仕立て私達の価値観や道徳観を次世代に伝えていくという文化継承機能は、より重大である。子どもは、意識的、無意識的に親の生活様式を真似して身の周りにある用具の使い方を知り、言葉の使い方覚えてきた。よい悪いは別にして子どもは、いつの間にか家庭における親の価値観や行動様式をコピーして一人前の大人に成長して来たのである。

現代社会の多くの人達がこの家庭における文化継承機能がおかしくなり出していると感じ始めているのではないだろうか。例えば、地べたに平気で腰を降ろしている男女や、援助交際を平気で求めていく女子生徒、さらには繁華街で夜通し騒いでいる若者などを見ていると、どうしてこのような現象が出て

きたのだろうかと首をかしげる人も多いのではないか。このような現象は、もちろん単純な因果論で結論づけられるものではなく、種々の要素が複雑に積み重なってきているものであろう。例えば海外文化の影響であるとか、マスコミの取り上げかたに問題があるとか、教育カリキュラムの内容に問題があるとかいわれていたりする。

幼児教育関係者には予見された

今日の社会変化

しかし、これらの若者の問題を担当している中学校の教育関係者に言わせるとこれらの現象の発端はそれ以前の小学校や幼稚園や保育所時代に原因をさかのぼることができると言っている。そして長い間幼児教育に携わってきた関係者に聞いてみると、幼児の家庭環境が昔と今ではまったく違ってしまっただけが分かる。幼児教育に関係している人達に

とっては、幼児の生育環境が時代と共に大きく様変わりしており、「やはり予想していたことが起きていく」という感じを抱かざるを得ないのが実情であろう。これらの現象の萌芽である家庭崩壊は、すでに現在の若ものの幼児期の教育の中に見られたのである。やはり幼児期の子育ての手抜きが、青年期になって社会現象として心配していた通りの現実になって来たのである。いまの若者達の今までの親子関係では常識と思われたいろいろな考えを否定するような事例が起きるようになったのはそう古いことではない。

幼児期における諸事例

わが子を愛せない事例

ある三十四歳の母親が四歳児の長男の子育てについて次のように相談してきた。

「母親がわが子が可愛いと思うのは当然と言われて

いますが、本当にそうなんでしょうか。私には長男のやることなすことが不満の種で、可愛いとはとても思えません。どうもわが子と接しているとすぐに叩きたくなり、どなりつけたくなります。それを抑えて接しているだけで、消耗してしまいつくてしょうがないのです」

子どもと接するだけで毎日疲れがたまり、つい、夫が家に帰ってくるまでに何度かたいてしまう状況が続いていたとのことである。聞けば、それまで一流会社でOL時代を過ごし、結婚し子どもが生まれてからも二歳までは義母に子どもをあずけて勤務を続けていたとのことであった。それが、半年前に義母が病気になる、勤めをやめて家で長男と向き合って生活するようになってから、ふさがちになり長男のやることなすことに気になり始めた。わが子のやることなすことは（会社の同僚や部下に比較し



て)まどろっこしくて見ていられない。ついこうやるんだとどなりつけてしまうとのことであった。

この母親には、もっとか弱い存在であった乳児期のわが子の姿を見ていないところが問題だった。母親の意識は、会社に勤務している時のイメージが常に付きまとい、家事も育児も短時間能率主義で済ませている様子が見て取れた。子育てとは、促成栽培のようにはいかない。毎日が同じ物事の繰り返しと思える時間の流れの中で子どもと向き合って子ども意識のペースに合わせて時間を使い、気がついて

見たら子どもがいつの間にか成長していたというように過ぎるものである。この事例でも母親が子どもに合わせるペースをつくるのに半年間のカウンセリングが必要であった。

子どもの方から親を選んだ事例

別な母親から次のような事例を受けたことがある。

「うちの子どもは近ごろどうしても家に帰ってきてくれないんです。この子の祖母の家が幼稚園の近くにありますので、祖母に幼稚園の迎えを頼んでおいたのですが、幼稚園から帰って、近くの公園でいるからそれでいいと思っていたのですが……そうしたら祖母の家の子どもになるっていったきり家に帰ると言わないんです」

常に芸術家の父親が家で創作活動をしていて少し騒ぐと怒られるが、祖母の家では子どもが遊ぶのは

自由にさせていたために家に帰りたくないと言いつつめたらしい。子どもの意見を聞いてみると「お母さんもお父さんも家ではけんかばかりしているの。でもこちらの家では皆にこにこしているからこっちの家の子どもになりたい」ということであった。

カウンセラーが「いつも周りの人がにこにこしていてそれであなたはうまく成長出来ると思うの？」と聞くと「でもこわいお父さんやお母さんの家で大人になるよりましでしょう」という答が帰ってきた。二か月かけておじいちゃんとおばあちゃんに協力してもらい子どもを家に戻したが、子どもの方が自分の成長についての見識をもっているのではないかと思わせられる事例であった。

「僕、生きていたくないの」

子どもとは生きる衝動を強くもっていて、死に対する感情表出を行うことはまずありえないと長い間

教育関係者には信じられてきた。しかしながら、今日では子どもでも死の衝動もあるし、自殺もありえろと考えられるようになってきている。

ある母親から五歳の男の子の食欲がないのでどうしたらいいかと相談があった。確かに子どもは痩せていて見るからに元気がなさそうであった。初めは身体の病気かと思われたが、各種の検査でも特に異常がなく、気持ちの問題ではないかと相談を受けたのである。子どもと遊戯療法を行いなから一緒に話をして見るとあるとき、ふと「僕、生きていたくないの」という言葉がでてきた。なぜそんな言葉が出てきたのか、じっくり時間をかけて聞いてみると父親が家を出て行って以来、この子にとっては、母親が夕方から働きに出るようになって家で一人で夕食を食べ、後片付けをしてテレビを見ていることが日課になった。母親の仕事について子どもなりに理解し、「僕がいけない方が働きやすいの」と言ってい

た。カウンセラーが「そんなことはないよ。君が早く大きくなってお母さんを楽させてあげようよ」というと、「そんなこと出来るはずないよ」

といい、「僕は大人まで生きられないもん」という言葉が返ってきた。「君はどこも身体は悪くないのだから生きられるよ」というと、「だってお母さんに迷惑をかけるなら、早く死んだ方がいいんだもん」という言葉が返ってきた。結局この子の生き甲斐は母親の再婚相手が理解してくれることによって達成された。

減少してきた幼児期の親子接触

——子育ては一生の一大事

根気と時間がかかる子育て



幼児期の子育ては手のかかることであり、母親やその他保護する人達が一生懸命に幼児に向き合って育てることによってようやく一人前に育つのである。人間は「人の間」に育ってこそ人となりえるのである。

そうでないと野生児のようになってしまうことはよく知られている。他の動物と違って人間が知恵を獲得していくのは、自然に言葉や生活習慣を覚えるのではなく、幼児時代に意図的に言葉を話して聞かせ、幼児に分かる言葉で生活習慣を教える人がいたからこそ、文化の継承が続いてきたのである。子どもを育てることが片手間の仕事で済まないことは長い人類の歴史が示しているはずである。

子育ての特徴は、成長時間という限られた時間制約の中で、タイミング良く子どもの成長に合わせて必要な知識や技能や態度を教えていかなければならない。少し幼児教育用具が改良され子育てが楽になったからといって子育てが困難で根気のいる複雑

な作業であることは、現在でも変わらない。子どもの発達にあわせて幼児に分かる言葉を用い、幼児と同じ目の高さで物事を見つめ、幼児の考えていることを理解し、人間世界の言葉に直して解釈できる大人がっていないなければ子育ては成立しない。子どもがテレビの前で静かに見ているからといって、自分と同じ文化をもった大人に成長してくるとは限らないのである。子育てとは同じことを繰り返し、根気よく何度でもやってみせて教えこむ一大事業である。

母親に安心して子育てが出来る環境を

このように大切な子育てが、結果がすぐに目に見えて来ないがために軽視され、後回しにされて来たのである。目の前の目立つ事象に気をとられて、次世代の文化の継承という長期観点が後回しにされたのである。その結果が今日の社会現象であろう。

子育てが敬遠され、少子化時代となり、日本中の子どもが減少して活力を失いつつある時代を迎えている。

一口に母親といっても、子育ての環境はさまざまである。子どもに十分な時間を接することができない母親もいるし、子どもの思考過程についていくのが苦手の母親もいる。

子育ては試行錯誤の連続であり、やって会得しなければならぬ部分がある。だから、「子どものうちから、自立心を育てようと離して育てました」という母親がいる反面、「十分な愛情が必要だと思って、密着して育てました」という母親もいる。どの程度離して育てたのか、どの程度密着して育てたのか客観的な尺度がないままに私達は子育てをいつの間に進めてきていたのである。しかし、現在の母親に必要なのはゆとりであり、試行錯誤の許される時間である。そして、絶え間なく激しく変化していく

社会にあって、子育てを担当している人達がゆとりをもてる立場においてやらないと、文化の継承をしない若者達が出来てしまうことに気付かなければならない。ここでは今まで母親を中心に文化の継承を論じてきたが、これは幼児教育や児童教育を担当している幼稚園、保育所の先生方や小学校の先生方についても同様である。もっと文化を継承していく段階における母親や教育者の役割を大切にしていかなければならない。

今の社会のさまざまな現象を見ると、幼児期に子ども達が十分に基礎的価値観を身につけるべき段階に手抜きされ、文化の継承がとぎれてしまったことを感じるのである。私達はもう一度、初心に戻って幼児時代の発達段階の教科書を読み直すべきである。

(お茶の水女子大学)

子どもにとつての

仲間の意味について考える

中島 寿子

保育の場では、よく「お友達」「仲間」等の言葉が聞かれる。そして「仲間なんだから云々」と言われることもあるようだ。しかし、そのような言いわけ「仲間」は子ども達にとってどのような意味があるのだろうか？

ある幼稚園の子ども達との出会いによって、私はこのことにこだわってみたいと思うようになった。

「Tが休みでよかったな」

この子達が年長に進級した際、クラスのメンバー

はそのままで、担任のみが変わった。私は年少(四歳)の時もこのクラスにお邪魔していたのだが、二か月以上間をあげて久しぶりに来てみると、何だか変な感じがする。それは担任になったA先生も同じである。

新学期が始まったばかりの四月、A先生は男児達の会話に驚く。「Tが休みでよかったな」と言い合っているのだ。驚いたA先生が「どうして?」と聞くと「だっていじめるから」と言うのである。そして、そのTが遊びに入れてもらえないということも目につく。

事例1 五月二十八日

保育室の中央にKを中心として、Y、S、U、M、Hが積木で大きな二階建ての「宇宙船」を作り、その中にもぐり込んだりして楽しんでいる。

Dはゴザや積木を持ってきて、一人で別の場所に

自分の基地を黙々と作っている。

Tは「宇宙船」の周りをウロウロする。「宇宙船」の中にいる子達が積木の隙間から外をのぞき「あ、Tが見えた」と言うと、Tはニッと笑って「宇宙船」を外から足で激しくドンドンと蹴る。すると、「やめろよ!」と強く言われてしまう。

*

「宇宙船」から出てきたYとUが戦いごっこを始め、そこにTも入る。どんどん「宇宙船」の子達が入ってくるので、戦う順番をジャンケンで決め、勝った子から順番に二対一の勝負を始める。しかし、そこにKもやりたいと入ってくると、戦いごっこは中断となり、もう一回最初からジャンケンのやり直しとなる。

Kの思いのままになるのが気に入らないTは、Kの体をグイと押してジャンケンに入らせない。すると、Kは「なんだよ、いいじゃないか!」と言い、

みんな黙ってしまう。Tは「もういいよ。みんないいもんでいいから。そのがスッキリするよ。やろうよ」と言うが、みんな「宇宙船」に戻ってしま

う。
Tは「宇宙船」の側にきて「じゃあ、このおうち、壊してもいいのか」と「宇宙船」の二階に座ったYに言う。

*

そこにA先生が戻って来る。YはA先生に「Tが壊すっていう」と言う。先生は「本当に壊すんじゃないでしょ。壊すって言ってるだけでしょ」と笑顔で言う（内心戸惑っていることが感じられる）。

Tが黙っているので、「T君、いやなことがあったの？ 仲間に入りたくないの？」と聞くと、「T君も作れば？」というA先生の言葉

で、Tも一人で基地を作り始める。

Tの基地が随分できた時、Kは自分の「宇宙船」の二階にHと立ち、「こっちの方が高いな」と満足気に言う。

Tについて

Tについては私も年少の頃から気になっていた。周りの子とのやりとりを見ると、言葉で表現するのは難しいが、違和感を覚えるのである。なんだか思いが通じ合わないことが多い。そして、思いが



通じない時はもちろん、彼にとっては挨拶がわりなのか、いきなり大声を出したり乱暴に振る舞ったりということもあった。本当は繊細な所があり、まだ幼い部分も多いTなのだが、このようなことから次第に「強い子」「こわい子」と見られていったようだ。

Tは「仲間」の象徴である基地やお家に無理矢理入ってトラブルになることも多かった。Tとしては、その関係の中に入っていきたいという思いがあるのだろうが、Tの思いが伝わらない相手の子からすると、自分達のところに関係ないのに何で入ってくるの？ となる。

私の感じていた「違和感」を周りの子もTに対して感じていたのではないだろうか。そしていきなり乱暴な行為に出るため「いじめる」という見方が固定し、受け入れてもらえないイライラをTはまた乱

暴な行為で表し「ほらまたTが」と言われるという悪循環になってしまったようだ。

Tは事例1の言葉にもある「いいもん」「わるいもん」を年少の時にも口にしたことがあった。自分が見んなからどう見られているかをTはTなりに感じていたのだろう。自分が「わるいもん」でもその方が「スッキリ」すると言うTを見てみると、とても切なく苦しい気持ちになる。

Kについて

男児がKを「一番隊長」にしてKの指示通りにかたまって遊ぶことが多いことも、A先生を悩ませていた（A先生はこの状態を「団子状態」と呼んだ）。

Kは体も大きく力も強い。一人っ子で大人の中で育っているのです、言葉も達者で親分肌。他の子達は第二子、第三子なので兄と一緒に遊ぶ感覚で楽しん

でいるのかも知れない。しかし、Kに自分の意見を言うとき、「誰が一番隊長だと思ってんだよ」と言われ、それ以上何も言えないという姿も目につく。魅力的なおもちゃがあるKの家に子ども達がよく遊びに行っていたことも関係あるのかも知れない。

Kは入園当初、幼なじみの女兒と二人だけで遊ぶことが多かったのだが、だんだん自分が出せるようになってきたという経緯がある。

Kの一番隊長へのこだわりは、そのことでみんなから認めてもらえているという実感があつたからではないかと思う。「一番隊長であること」で自分の言いたいことを言い、それを受け入れてもらえるとすることは、Kが自分の存在感を確認するために大事なことだと思われる。そしてTはそれを脅かす存在だったようだ。

このように考えていくと、TのこともKのことも、もっと丁寧に見ていく必要があつたのだ、私は一休子ども達の何を見ていたのだろう、とTの辛い状況を見るたびに悔やまれ、申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。

A先生の思いと援助

「団子状態」で遊ぶ子ども達の様子を見てきて、本当に自分のやりたいことなの？ 遊びたい人なの？ とA先生は感じていた。

A先生のいう「団子状態」の子ども達を見ていると、同じ場にいること、同じ遊びをし、同じ動きをすることで、「みんなと同じである自分」に存在感を感じていたように思われる。クラスのメンバーは変わらなくても、進級し環境が変わる中で、彼らなりに自分の存在感を確かめる必要があつたのかも知れない。

TやKにどう対応するかということはおもろんだが、周りの子をどう育てるかということが大切だとA先生は考えていた。「自分のしたい遊びを、本当に遊びたい友だちと一緒にしてほしい」「自分の思い・考えを伸び伸びと表現できるように頑張ってほしい」という願いから、一人ひとりの子がやり始めた遊びを支え、遊び自体が楽しくなるように、素材・道具の準備をしたり、自分も一緒に会話を楽しみイメージが広がるようにしてみたりした。

そういう試行錯誤を続ける中で、好きな遊びのなかだけでは限界があると感じると、一人ひとりが自分の思いを出せるように、一人ひとりのよさに気づくようにと、いろんな活動をクラスの活動として取り入れていった。その中で、おとなしいと思っていた女児がみんなの前でしっかりとした声で歌う姿に感心したり、「一番」と思っていた子が苦戦していることを簡単にできる自分の力に自信を持ったり、と

周りの子や自分の様々な面に気づく姿が見られた。

A先生はTを「入れてあげて」とは言わなかった。事例1のTへの言葉にもあるように、A先生は子ども達に「一人でもいいじゃない」「すてきなことをしていると来てくれるよ」ということを伝え、その姿を認め支えていった。「みんなと同じであること」が大事だった子ども達にとって、これは新たな価値観の提示だったと思う。

その中で、Dは自分のやりたいことを求め、一人その「団子状態」の中から出ていき、自分の遊びを始める。この日も一人で基地を作り、製作にも打ち込む。先生はDにじっくりつきあう。この日、Dの基地にあとからMがやってきたという記録には「ずっと一人じゃないんだと思う」と記されていた。A先生の思いが伝わってくる。

一人になってしまうことの多いTに対してもTが

やり始めたことを暖かく見守り支えていった。その中で、Tも自分への自信を深めていったようである。

Tの変化、Rとの出会い

みんなで製作をしていたある日、Tが柔らかい表情でA先生にもたれかかるといふ姿があった。このようにTが先生に甘える姿を初めて見たという私に、A先生は「ありがたいことですよね」としじみみと言う。

このようなA先生の支えの中で、Tは随分穏やかになってきたし、相手のために何かをするという今までにはなかった姿も見られるようになり、その姿もA先生は認め、周りの子にも伝えていった。

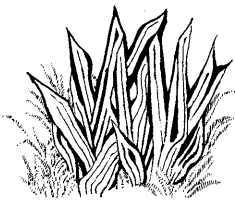
二期期になり転入してきたRとの出会いで、さらにTは変わっていく。

事例2 十月八日

TはRと積木で二階建ての大きな家を作り終わり、家の二階に二人でのぼって座る。TはRに「R、この家気に入った？」と聞くと、Rは「うん気に入った」と答える。Tは満足そう。

津守真先生は、人間が育つということを「存在感」「能動性」「相互性」「自我」の側面から考えられているが、前に私がTに感じていた違和感はこの中の「相互性」をあまり感じられないところにあつたのではないか。

津守先生は「相互性は、順番や規則や指図に従うのとは違って、相手と互いに調節し合って動く生命的行為です。それにはまず、



大人が子どもに合わせて応答することが先です。それから子どもが相手に合わせて動くようになりませ、相互性は、互いに相手に応じて自分を変化させ、新たな関係をつくり出す力です」と述べられています。TはA先生とのかかわりの中で自分を認めてもらい自分の気持ちにそってもらう相互性の経験をし、先入観を持たず受け入れてくれるRと遊ぶ中でもその心地よさを味わったのだと思う。そして「相手に応じて自分を変化させ」ようとすると前向きな変化をTの中に感じるようになる。不器用なTが他の子の基地やお家に無理矢理入ろうとすることで求めているのは、こういうことだったのかも知れない。

一人ひとりの育ち

二期期の後半から卒園にかけてドッジボールへの熱中が続いた。最初はKが中心になって決めていたチームわけにA先生はくじびきを取り入れてみる。

やってみるとこれが楽しい。Kも「いい勝負だ」と満足し、その後は「グーチー」で決めるようになって行く。

ドッジボールは一人ひとりがそれぞれの楽しみ方ができ、いろんな子がいることでよけい楽しくなる。この遊びに熱中する姿に一人ひとりの育ちが感じられた。思いきり体を動かし、楽しい経験を重ねていく中で、そのワクワクした気持ちから、ゲームが始まる前からみんなでおどけ合ってみたり、気持ちの高まった子がウルトラマンティガの歌を歌い出すと、みんなで大合唱となったりする。以前とは違い、「ズル」をすると、KやTにも他の子が激しく抗議したりということもある。「大きくなった自分」への自信と「大好きなドッジをみんなでやるのが楽しい」という気持ちがちりちらにも伝わってきて、もうすぐ卒園なんだと思うと、うれしいうなぎみしいような何ともいえない気持ちになった。

この頃になると、Tは「いじわるする」とは言われても「いじめる」とは言われなくなる。気がつく、前はあんなにこだわっていた「だれが一番隊長か」という言葉も聞かれなくなっていた。一番であること、何でも同じにすること等にこだわらなくても、自分がみんなに認められていることが感じられ、友達との気持ちのつながりの中で、より意欲的に自分の遊びに打ち込むようになったのだと思う。一人ひとりの思いがあり、それを他の子とも分かち合えた時に、一緒であることの喜びも物事に取り組む意欲も増す。こういう仲間の中で子ども達はこんなにも輝くということを彼らから学ぶことができた。

冒頭に「子どもにとっての仲間の意味」と書いたのだが、このように考えていくと「子どもにとって」だけでなく、私たち誰にとってもそうなのでは

ないかというふうにも思えてくる。「仲間の意味とは？」という問いに対しても、まだまだ自分の中でスッキリしないことはかりで、当分はこのことにごだわることになりそうだ。

(愛知教育大学)

引用文献

津守真「愛育養護学校の教育」、『発達』第三十六巻九号

ミネルヴァ書房 一九八八 p516



大人の保育と 子どもの保育

津守 真

私はいま、大人の福祉施設で、すでに成人した人と付き合うことが多い。大人の場合でも第三者として観察し評価するのではなく、人間として対等にその人とかかわることが保育の根本であることは子どもの場合と全く変わらない。

ひとりの青年は、机の上の絵の具を手に取り、絵筆からぼたぼたと絵の具を垂らし



ながららふらふら歩きまわる。多くの人が、その青年は落ち着きがなくて何もできない
と思っている。その青年と根気強く深く付き合っている造形の先生は、何人かの人が
平和に集まっているところにその青年は寄って来て、じっと座って力強く絵の具でか
くののだと言う。その人と向き合ってかわる保育者は、通りすがりの人とは違った見
方をしている。青年もその人には人として応答する。この青年は、本気に肯定的に向
き合う保育者とこれまで出会っていなかったのかもしれない。困ったと見える行動
は、その人が保育者と出会って成長してゆく人生のひとつまにはかならない。大人に
なつてからの保育は、子どもと違って時間がかかるし、一層骨が折れるが。

別のもうひとりのは、他人の髪を引っ張ったり、噛みついたり、冷蔵庫のドアを
あけたりしめたりするのが常である。このような場面で、常識にかなわないその行動
をどう止めるか、どう叱るかということとは職員の間でしばしば話される。私もその人
とかかわるとき、自分が他人からどう見られているかを気にしており、そのことを本
人は察知しているから、本当のかかわりになれないでいる。むしろ、私は、何事も起
こっていないときにこちらから優しく近づいて、ゆっくりとその人と積極的にかかわ
ることをしてみようと思う。私は毎日かわる人ではないから、通りすがりの短時間



のかかわりしかできないのだが。

ひとりの若い職員（職員というよりも友達と呼んだ方がよい）は、皆の目を盗んでひとりで外出しようとする青年と、地域のホームで生活をはじめた。何か月もたたないうちにその青年はひとりで留守番をするようになった。その職員との信頼関係の基礎の上にできたことである。毎朝その青年は、その職員に靴下をはかせてもらうのだという。靴下をはいた途端に脱いでしまい、また履かせてもらうことを何十回も繰り返してから出掛けるのだという。これと同じことが小さい子どもの生活では毎日起こっていることを幼児保育者はよく知っている。子どもを育てたことのないその若い男性職員は、青年の靴下に付き合うことが、更に自立した生活へのステップであることを知っている。

こんなことを体験している最中に、愛育養護学校の保育の場で、私はひとりの元気の子どもが、滑り台の上から三輪車に乗って滑りおりようとしているところに出会った。まわりにいた大人たちが「あぶない」と、行ってそれを止めた。下には他の子どももいたし、実際危なかった。滑り台の上には私は、三輪車を手で押さえ、そ



の子は大声をあげた。一瞬、私は自分のあり方が問われていると感じた。私は自分の向きをかえて、その子に、それはやれないことをゆっくりと話した。その子は、私の顔を見てうなずき、他の遊びを始めた。私は一緒に楽しく遊んだ。周囲の人達と一緒にになって私が止めさせようとしたときには、子どもは無理にでもやろうとし反抗した。周囲の目を気にするのではなく、その子と向い合っただけかかわることのたいせつさを、私はまたもや教えられた。

保育は英語では education and care と訳すが、そう考えると、保育は子どものことだけではなく、大人にもひろげて考えることができる。

元氣の素

今井 七重

私達の滞在もそろそろ折り返し地点にさしかかろうとしています。

今回は、これまでの滞在中に感じた諸々のことを書いてみます。

こちらに来てほどなく、私は、香港人の先生の自宅で、月に二回中華料理を習いはじめました。一般的な家庭料理を習ったり、日本にはない、こ

ちらの珍しい食材の調理法を教えてもらったりしながら、毎回四品、五品の料理を楽しんでいます。先生のデモンストレーションを見て、試食というパターンで、日本の料理教室のように実技がない点が多少不満ではありますが、狭い香港でそれを期待することは無理です。事実、趣味の範囲で習う料理教室は、いずれもこの形態です。た

だ、暖め直して出されるレストランの料理とは違い、私達のためだけに、その日の早朝、市場で買求めた新鮮な食材で調理しますので、味は格別です。毎回、この日を指折り数えて待っているのですが、理由は、単にその料理だけにあらず、先生の人柄に触れることで、元気の素を分けてもらえるからです。

先生は、五十代半ばですが、ともかくバワフル。いつも明るく前向きで、バイタリティにあふれています。数年前まで、日本人観光客や日本への香港旅行者へのガイドをしていたそうで、日本への造詣も深く、当然のことながら、日本語もできます。北京語、広東語は、母国語ですし、英語もこなします。しかし、それだけでは満足せず、ここ数年は、フランス語の勉強に励んでいます。通常お料理は、九時三十分より始まるのですが、その前の八時三十分より、プライベートのフラン

ス語レッスンを自宅で受けています。休みが二週間ある年末には、フランスへ語学留学をし、午前中は語学学校に通い、午後は、得意のお料理教室に通い、一般家庭に滞在し、語学に磨きをかけるのだと意気込んでいます。先生には「もう、年だから」の言葉は、存在しません。感心する私達に「日本人はいくら、時間とお金があっても私のように、一人で行動はできないでしょう」と凶星発言をします。

先生のスケジュールを聞いてみると、一日をいくつもの枠に分けているような気がします。午前中、午後、夜の三つだけではなく、朝食前、午前中、午後前半、午後後半、夕食後の五つです。フランス語のレッスン受講後は、お料理を教え、午後は、水泳仲間と水泳をしたり、大好きな社交ダンスを習いに行ったり、夕食前は、広東語や北京語を教え、夜は、来客をもてなす等という一日

は、日常茶飯事です。一つ予定が入るだけで、その一日がすべてそれを中心に回る私の、三、四日分を一日でこなしています。「日本人の奥さんは、香港の奥さんと違って、働いていないのに、どうしてそんなに忙しがつているのだらう」と不思議がられます。時間の使い方及び精神力の違いでしょうか。

確かに、多くの香港人の奥さんは、一日働いていて、帰ってから日本のように冷凍食品も充実していないので、ちゃんとお料理をしているようです。しかも、基本的に毎日買物に行くのが普通です。その日に必要なものだけを、新鮮なものを売っている街市（ガイシ）と呼ばれるオープンマーケットに買いに行きます。最初に街市で見た所狭しとかごに入れられた、生きた鶏の哀れな鳴き声と、何かを訴えているような瞳に、卒倒しそうな私ですが、今では馴れました。でも、

未だ一羽買
う勇氣はな
く、時折、
既にかごに
入った手羽
先二十本約
百五十円を

買う程度です。現地の人は絶対スーパーの鳥は、買わないといわれるだけあり、さすが、身がプリプリしていて、おいしいです。ところで、新鮮な鶏の見分けかたというのを教えてもらいました。首の部分をつかんで、筋が、少なければ、若い証拠、しっぽをつかんで、穴が小さければ、それだけ、卵を産んでいないので、やはり若い証拠になり、購入のポイントになります。でもこの知識、私の場合、生かせそうにありません。

さて、香港は、前述したように共稼ぎが多いの



で、留守中の家事や子どもの世話は、アマと呼ばれるメイドにまかされます。アマのほとんどは、フィリピンですが、インドネシア人、タイ人、ネパール人、スリランカ人もいます。フィリピン人は、英語能力が高く子どもの教育ができる、学歴が高く学位がある者もいる、賢くて、適応能力が優れる等々の高い評価を得ています。通常、一緒に暮らすフルタイムの勤務形態ですが、パートタイムにアマを利用する人も多く、日本人は、後者を選ぶ人が多いようです。ただ、日本人は一般的に人を使い慣れていないので、「今日は、アマさんが来るから、少し片づけなくっちゃ」という感じが多いようです。私も、少々贅沢ではあるものの、週に三回、各四時間フィリピンの方に来てもらっています。仕事をしてもらいながら、女同士、色々な話に花が咲きます。彼女を通じて、私は、日本の物質的な豊かさや精神的な豊かさ

が、必ずしも一致しない事実を改めて感じました。少し、彼女のことについて書きます。

香港に来て既に、八年というから、三十歳で、当時七歳と五歳の男の子を両親に預けて、国を離れたことになりました。彼女の場合は遅い方で、普通は高校を卒業して、すぐに、香港にやってくる人が多いです。まだ、幼げな女性が、雇い主の子どものお守りをしている姿をよく見かけます。香港・フィリピン間はわずか一時間の飛行時間なのにも拘わらず、フィリピンに帰るのは、二年に一回一か月、もしくは一年に一回の二週間のいずれかです。母国では、大学を出ていても仕事がないことや、子どもの高額な学費を払うためには、家族の誰かが、国外で稼ぐ必要があるのです。男性の場合、庭師や運転手としての仕事はありますが、数が少ないため、やはり女性が家族の期待を背負って香港にやってきます。住み込みの場合

は、三畳程度の部屋を与えられるか、子供部屋を共有します。この場合は、ベッド二つおけるスペースはないので、彼女たちは、床に寝ます。

上手な英語を話すのに、彼女らにはそれをいかに知的仕事はなく、あるのは肉体労働のみです。仕事の選り好みなどできません。家族の期待と生活がかかっているからです。寝る時間以外は、ずっとお仕事という過酷な条件の下での唯一の楽しみは、週一回のお休み（日曜日の場合が多い）に、公園で同郷のお友達とおしゃべりをして過ごすことです。それも雨が降れば、不可能になります。しかし、暗くはありません。「年をとったら、国に帰ってゆっくりするから、今はいっぱい働きたい。だって、元気なのだから。それに、自分の母も伯母もそうやってきたのだから」と語り、誰をうらむでもなく、自分の境遇を必要以上に卑下するでもなく、淡々と仕事をこなすアマ

んの言葉に、私は感動すら覚えます。日本では、女性誌に出てくる女子大生が、ブランドものを誇らしげに自慢しているというのに、同じ年頃のフィリピンの女性は、小さなバッグ一つで国を離れ、異国の地で働いています。集団就職なんて、日本では死語になりつつあるのに、アジアの国では、いまだ日常なのです。悲しいけれどこれが現実です。

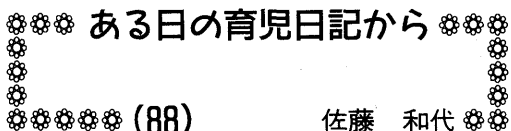
香港が大好きだという人は、その理由を「香港に来ると、生きるパワーを分けてもらえるから」と言います。私は、その理由が、料理の先生との出会いや、真剣に日々を生きているアマさんの姿から、なんだかわかるようになったこの頃です。

（元幼稚園児の母・香港在住）

ある日の育児日記から

(88)

佐藤 和代

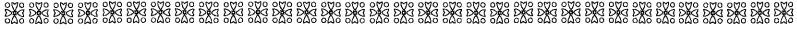


踏切があくのを待っているとき、有が聞きまし
た。「ねえ、電車と自動車って、どっちが先にで
きたの?」。私はしばし考えて、「どっちなあ。
一番最初にできたのは蒸気機関車なんだけどね」
「いつ?」「百年より、もっと前ね」。すると有は
真顔で「お母さんが、子どものころ?」: おいお
い、私が何歳だと思ってるの。
なんてあきれてもしようがない。ついこの間ま
で、有は「きのう、きょう、あした」以外の時間
の概念がなかったような気がします。また来年、
とか、今度の春には、なんて言われると、必ず

「あしたのあしたのあし
た?」と聞き返してい
た。小さい子って、あま
り長い時間は想像するこ
とができないのでしょ
う。それを思えば、歴史上のことを質問してきた
り、「百年」と言われて何とか理解しようとして
いること自体、大変な進歩だわ。
そんなことを考えていたら、横から圭が口を出
してきました。「ばかだねー、有って。蒸気機関
車が発明されたころでしょ。もっとももっとずーっ
と昔だよね」。



でも有が「いつごろ?」
と聞くと、圭は少し考え
て、「お母さんのお母さん
が子どものころでしょ?」
うーん、小学二年生でも
この程度か。



小さな体験から

榊田 正子

保育者の揺れ — ピンチヒッターの体験 —

ある日私は、三歳の担任に代わって約四十分ほど保育を引き受けた。その日は卒業式の予行で、そのクラスの担任が年長児と共に大学の講堂へ出かけなければならなかったためである。

九時半頃からだったので、子ども達の遊び始めの時間帯で、「○○して」「××を作っ
て」「ねえ、先生」といった要求が多く忙しかった。保育室には日頃からよく出入りして

いるので、子ども達にとって私はなじみの無い存在ではないが、担任の先生に対するのは明らかに違う態度で、子ども達は私に働きかけてくる。

「△△のお面つくって」

と、自分で描いて切ったお面を持ってきて私の顔を見上げ、

「あそこに黒い紙あるでしょ。あれで、頭のところつくるの」

と、親切に教えてくれる子どももいる。三歳児といえども、私の立場や今の状況を察してそのように行動できるのだと感心しつつ、そうやって子ども達に支えられながらも、そこで必要とされているおとなとしての役割の手応えを感じたりしながら、それぞれの要求に精いっぱいに応えた（精いっぱいというのは、普段から見聞きしたり、その日朝から私が感じとっている個々の子ども達の様子を、その対応に生かしたつもりなのである）。

そして、ひとしきり忙しく対応しているうちに、子ども達はそれぞれに遊びを見つけて取り組み始めたようで、一瞬私の手が空き、私のまわりに子どもの姿が無くなった。それまで夢中で関わってきた状況がフッと変わって、一息つきながらも、その場の子ども達の織りなす雰囲気からちょっと浮いてしまったようなとまどいを感じた。子ども達と物理的には同じ状況に居ながら、その時空間を共有している感覚が持てず、どうしてよいかわからないとまどいである。子ども達はそれぞれ穏やかに遊んでいるように見えて、その様子からは、次の私の行動を動機づけるサインをキャッチすることができなかった。保育者と

してすべきことがあるにちがいないのに、その行動の基準が見当たらず、軽い焦りすらも覚えた。無意識に視線が時計に行く。十時少し過ぎ。以前、保育者同志の話合いの時に、A先生が、大体決まって時計に目が行く時間帯があると言っておられたことを思い出す。その時のA先生の感覚は、今の私の感覚と重なる部分があるのだろうか、それとも全く異なるもののだろうか、等と漠然と考えてしまう。

私は、所在のない居心地の悪さから逃げるような気持ちで、足もとに無雑作に散らかっているブロックを二つ三つ拾って箱に入れた。だがすぐに、その自分の行動が何とも管理者的でいやだと感じ、また、もしこういう動作を目ざとい子どもが見つけて「もうお片づけ？」と反応するとしたら、それは本意ではないし……という意識が頭をもたげたので、それ以上ブロックを拾うことはしなかった。

このような居心地の悪いとまどいを感じ、色々な思いをめぐらせた時間は、現実にはほんの二、三分のことであつたと思うが、私にはずいぶん重く感じられた。

幸い(?)なことに、園庭に居た一人の女兒が保育室の出入口で「せんせい」と呼んだので、その呼びかけに応えることを通して、私は再び子ども達の生活の場に合流することができた。そして担任の先生も戻って来られたので、私の役目は終了した。

ピンチヒッターの役割は無事終了したものの、私はその後ずっと、その時に感じた数分

間のとまどいにひっかかっている。あのとまどいは、自分の何を意味するものなのか。あのような状況が一般的にも起こり得るとすれば、そこから何が考えられるのだろうか。

とまどいのうしろにあるもの

前にも書いたように、私は、突然子ども達の雰囲気から浮いてしまった感じがした。その子ども達との接点を見つけることも、できなかった。それでいながら、保育者として何もせずに居ることにいたたまれない気持ちであった。こんな自分自身を改めて見つめ直してみると、いくつかに気がつく。

まず、それぞれに遊び始めた子ども達を見た時、私は、穏やかに遊んでいるというように平面的な全体像でしかとらえることができず、一人ひとりをその子ども自身の内様として受けとめていないのである。毎日この子ども達と継続的に生活を共にしている担任の保育者なら、たとえ表面的には穏やかな状況でも、個々の中に、壁に突き当たって足ぶみをしている様子、周囲との関係の中で自分を発揮しきれずに居る様子、一緒に居てほしいと願っている様子などを識別できて、それぞれに配慮することができるにちがいない。求めは無くても、手が空いたら即座に飛んで行って心に寄り添いたい子どももいるの

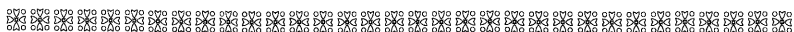


ではなからうか。それ等の保育者の意図が生きる状況である。保育者のそのような状況の受けとめ方、行動の表し方ができるはずの時に、個々の子どもの発達の課題や生活の流れを十分に把握していなかった私にはそれができず、子ども達との隔たりを感じてしまったと考えられる。

特に私の場合、日頃から、担任経験が無い為に担任の先生と同様には動けないと、勝手に自分自身に枠をはめてしまう傾向がある。後になって考えれば、子ども達もピンチヒッターの保育者である私を認知してくれているのだから、その立場をもって関わることも、ふさわしかったのではないかと思われるが、日頃からのとらわれが行動を不自由に行っていることが、あらためて見えてくる。

また私は、保育者として何かしなければという思いに駆られてもいた。もし仮にその時、保育の場に設定することを予定していた事柄があったとしたら、私は躊躇なくその準備を始めたのではなからうか。そして、個々の子ども達の状況が見えないまま、自分が持っている予定をその場の行動の基準として子ども達の間に入って行きそうな気もする。私にとってあのとまどいは、こんな危機をもはらんだ一瞬であったことにも気付かされた。

体験を通して考える



子ども達の生活の環境は、所属のクラスの範囲にとどまらず、園全体にひろがっていることが多い。今回のような担任のピンチヒッターばかりでなく、色々な立場の保育者と関わりを持つことはごく日常的なことである。保育者も、自分の担任する子どもに限らず、様々な場で、その場の責任ある保育者として誠実に子どもと向き合うことが求められる。最近ではティームティーチングの導入等が検討されているところもあり、保育者達かどのような協力体制をとれば保育が一層充実し、一人ひとりの子どもの育ちを支えることにつながるのか、きちんと検討されなければならないことである。個々の子どもの育ちの様子(情報)と、その育ちをとらえる姿勢とを、保育者同志で充分に話し合って調整を図ることが重要なポイントと言えよう。また、話し合いを通して各保育者が、保育者である自分の傾向や特徴に気づき、その気づきをもって主体的に保育に取り組んで行かれるようになることも、同時に大切である。

以前、複数担任制に関して「保育者同志をつなぐものは活動の計画であろう。それが無ければ動きにくい」という意見を聞いたが、私の体験を基に考えるならば、個々の子どもの育ちに関する情報を共有することなしに具体的な活動の計画のみを頼りに保育者達が動いてしまう場合には、その弊害は大であると言いたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

保育者の眼差し

……担任という視線

矢萩 恭子

年長組のクラスの子どもたち（三十四人）と園での生活をともにしながら、常に私が反芻していたことは、「担任として、クラスの子どもたち一人ひとりの気持ちをしっかりと受け止められているだろうか」ということだった。前年度入園してきたこのクラスの子どもたちも今やすっかり、園生活を自分な

りに展開できるまで幼稚園に慣れ、安心して関われる、友だちと呼べる相手を見つけ、それぞれにじっくりと遊び出し始めていた。こうなってくると、年少組の三歳児とは違って、一人ひとりをばらばらに見つめていくことは難しくなってきた、一緒に過ごしている子どもたち同士の間接性を抜きにしては、

どんな人の『いま』も見えてこない状況になってくる。しかも、子どもたち同士の関係性は、固定的なものであろうはずはなく、従って、ダイナミックに力動的に変化、変容しつづさまざまな現状を孕みつつ進行していく。

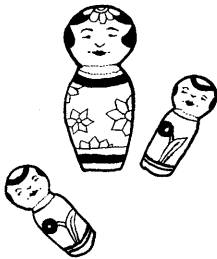
そんな中でも、担任としては、今各自がどういう方向へ伸びていこうとしているのか、どういうところで立ち止まり、助けを必要としているのか、何を喜びと感しているのかなど、子どもたちの姿が、表情が、視線が見える保育者でありたいと願う。

いつにない様子にはっとさせられる

五月の連休も明けたある土曜日。送り迎えのこの土曜日にS子は、珍しくグスグスと泣きながら登園してきた。この人がこんなにはっきりと感情を表に表すことはあまり見たことがなかったし、しかもテラスのところで母親と軽い押問答をしている姿など

更に普段は見られないことなので、私も少しどきつとした。母親に聞くと、履いてきた靴下が好みのものでなかったとのこと。真っ白で丈の長いハイソックスがよかったのに、履いてきた靴下はソックスだった。しかも、本人に聞くと、ゴワゴワしてかたいのがイヤだと私にも訴える。母親も本人の気持ちと、迫ってくる登園時間との両方を考えながらやきもきした朝のひとつを過ごしながらの、当惑した表情だった。

なぜだか分からないけれども、この日の朝に限って見せたS子のこだわりは、担任の私にはとても大事なものを感じられた。十分に迷って履いてくる靴下を決められなかったS子の気持ちや思い、一緒に着替え袋や、幼稚



園のたんすの中を探してみるが本人がこれならよし、と思えるものがなかなか見つからない。なおも、晴れ晴れとできない気持ちのS子が気になりながらも、次々に登園してくるその他の子どもたちからの要求や対応に追われているうちに、S子は自分からこだわっていた靴下のことは諦めてしまった。

その後、朝の始まりからつまずいてしまったこの日は、友だちとも遊ばず、一人ポツンとしている。聞いてみると、「だれもあそんでくれない」とこれた、いつになく自分の気持ちを私に話してくれた。何をしていいかわからないけれども、遊べなくてさみしく思っているS子の気持ち伝わってきたので、私は一緒に手をつなぎ、園庭へ出た。そして、出会ったクラスの人を誘って一緒にいろおにをして遊んだ。

S子は、クラスの中では大変大人しく、控えめで静かな感じの子どもである。習い始めたピアノが大

好きで、絵を描いたり冠を作ったりすると、とても丁寧に緻密に色彩を塗り分けたりする。怒ったり、泣いたり、といった感情表現も普段はあまり示さないで、担任としてはついつい関わりの薄くなりがちな、だからこそいつも気に掛かっているといったところの子どもであった。そのS子に、こうしてこの日はとさせられる出来事があった、いつになくS子とじっくりと関わろうと努力するきっかけを私に与えてくれた。こういうことは、担任として大勢の子どもと生活しているとしばしば起こることである。

子どもたちのことを、見よう、分かれようという気持ちが前面に出て焦っているときほど、むしろ子どもたちとの距離が出来てしまい、十分に交わることが難しくなってしまう。もちろん、担任が満足して子どもたちと遊べているかどうかが大変なのでないことは分かっているものの、そんなときは、なんだ

かこの頃みんなとうまく遊べていないな、という感覚になる。逆に、クラスで何か問題が持ち上がって、何とかそれを解決の方向へ導けるように担任の知恵が要求されているときとか、ある子どもの行為に頭を悩ませていて、それにかがふりと向き合わせるを得ない状況が続いているとき、或いは、すごく盛り上がって続いている遊びに自分も夢中になって取り込まれているときなどは、子どもたちの存在を肌で感じる事が出来るのでいろいろな人のいろいろな面を垣間見るチャンスが多く訪れてくれるような気がする。子どもたちが、子ども同士の関係の中で十分自分らしさを出して活動していれば、それで十分なはずで、殊更担任がその関係性の中へ直接入れてもらう必要はないのだろうが、そういう日が続くと、「今日は違った視点から子どもたちの様子を見てみよう」とは思えずに、何か淋しいような気持ちになってしまう。子どもたちとの距離を保つの

も、互いに気心が知れて関係が安定してくるこの頃になると、意外と難しいということもある。外側から普段は見えないところを見てみようと思えてみるものの、主客が渾然としたような担任の視線からは、かえって掴みどころのないこともある。子どもとともに生きた生活そのものなかにしつかりとどまるときこそ、担任も子どもと人間的な交流が持てるし、そういった人間的な交流のなかでこそ、相手のいろいろな面が肌で実感され得るということだろうか。しかし、やはり、一人の保育者が自覚して、意識できることには限りがある。もっとよく見るべきところを見落としてしまったり、目の当たりにしながら見えないでいることがたくさんある。それでは、一体担任として自分は、どうすればいいのだろうか。悩みに悩んでいるそういうとき、往々にして、子どもの方から私に気づかせてくれるような出来事に会おうことがあるのである。

繰り返し訪れる

五月のある朝の出来事によって、担任である私の視線は、その頃同時に起こっていた、いろいろな子どものいろいろな気になること、考えたいことなかで、S子の方へと焦点化された。私は、数日間S子を注意深く見守ることに努力した。しかし、これといって、大きな変化や困難がS子を襲っている気配は感じられないまま、その後平穩に毎日が過ぎ、一旦S子に向けられた担任としての注意の眼も再び日常の背景に退いてしまった。そして、秋を迎えた十月のある日にS子についてのこんな記録がある。

履いてきたスパッツが気に入らず、朝から泣いている。テラスで母親とぐじゅぐじゅやっていたが、母親が適当なところでスッと離れていたので、しばらく、保育室内をウロウロしてい

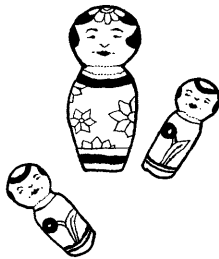
た。が、耐えきれず泣きだす。スパッツがズルズルしていてイヤだと言う。いろいろ慰めるが(Mも、上下おそろいでかわいいよ、と云ってくれる)、聞かないので私も様子を見ることにする。お面を作っていた仲よしのHと同じように画用紙を渡すと、一旦は、一緒に描き始めるが、あまり自分自身にその気はなかったよう为本の部屋にいたIを誘いに行く。ところが、はっきりとIに「いやだ」と断わられてしまい、困って私のところへ来る。「お客さんで入って行ってもいいのよ」と伝えるとホッとしてIのところへ行き、絵本を読み始める。

前にも似たようなことがあったな、とこのときの私は思った。そして、前回のとき以降のことでは母親をてこずらせることのないS子が、幼稚園に着てくるものことで、毎朝あれでもない、これでも

ないと時間を費やしていることを知った。母親は、スクールバスの迎えの時間に遅れてしまうことを気にしていたが、担任としては、S子のことであるから、年長ともなれば、もうこの服にしておきなさいと母親から言われれば我慢して家を出てくることもできるだろうとは思いますが、他のことでは、すんなりと幼稚園の生活を過ごしてきたS子がこうやって、ずっと頑張って主張していることであるから、ときにはバスに乗り遅れてしまうことがあるから、出来るかぎりつきあってみてもらえないだろうかという考えを母親に話してみた。幸い、この母親は、建設的に私の話を受け取ってくれたので、「この子にとっても私にとっても、幼稚園生活もあとわずかだから、自分にできるときには幼稚園まで送ってこようと思う」と言っておきかけた。保育者として、私も、S子の一日の始まりである朝のひとときを丁寧に付き合うような心がけることができた。

改めて考えてみる

前述のようなことがS子に関して起こっていた訳だが、私は、担任としてもっと深くS子の心に流れている戸惑いや悩みを感じ取って然るべきであったのだろうが、似たような場面に出くわしてもそれが何であるかそのときには、気づくことができなかった。秋になって次々とやってくる行事のことで忙しく過ごしていたなかで、この記録を書き残しながら、S子のことについて思いをめぐらせたことと思うが、その内容までは記録されていない。S子の示した出来事に対して私なりに感じ取ったことを支えにしてS子への対応や、見方を変えたり、新たにしたりしたはずではある



が、S子について何か結論めいた理解に達するということとはなかったように記憶している。

だが、今改めてS子のことを思い出しながら、二年間のクラスの記録を読み直し、S子の生活する様子や表情を思い浮かべながら考えてみると、ある解釈が私のなかにぽっかりと浮かび上がって見える気がするのには不思議である。欠席も少なく毎日毎日きちんと幼稚園に登園してきてくれるS子であったが、そして、本人なりに一緒に過ごせる友だちもでき、何かのときには、相手を手伝ったり助けたりしてS子なりに持てる力を発揮してくれるようにはなっていたが、自分をどんどんだしてくる他の子どもたちとは違ってどうしても影が薄くなりがちであった。もちろん本人の性格もあり、大人しく消極的であることがS子のありのままの姿であるなら保育者として私も、それをそのままに受け止めるべきであらう。

しかし、今になって考えてみると、クラスの中で、或いは家庭とは違う幼稚園という外の世界で、S子は、自分がどんな姿でいたらいのか、どんな顔を見せて過ごしたらいいのか、決めかね、迷い続けていたのではないだろうか、というふうに思われるのである。特に、この秋頃は、だいたいにおいてどの家庭も進学する小学校のことで考え迷う時期となる。当然子どもたちの園での生活にもそのことを反映したと思われる様子が感じられる。いよいよ深まるクラスの友だち同士の関わりのおかげで、思い切り遊びながらも、一方でまだ見ぬ小学生としての自分の姿を子どもたちなりに楽しみに、あるいは不安に想像していることが伝わってきた。S子の家庭はそのことで迷ったり揺れたりしているようには見えなかったが、それでもクラスの中での互いの状態は、子どもたち相互に影響を与えあっていたのではないかと思われる。

一体、今自分はどんな姿でいたらいいのだろうか、友だちは自分をどんなふうに見ているのだろうか、この先どんな未来が待っているのだろうか……。S子は自分というものの輪郭に対する不安としてそんな思いを抱いていたのではなかったか。そして、そのS子にとって衣服は、そんな迷いを抱える剥き出しの自分というものを他者の眼から被ってくれると同時に、このように見えて欲しいという自分なりの姿を演出し、実現してくれるものなのではないか。こう考えることで、着るもの（そう言えばS子はヒラヒラのワンピースを好んで着ていた）や身につけるもの（こと）で、はっきりと自分を主張し、思い通りにいかないときに悲しさを表していたS子の気持ちに近づけたような気がするの、私の思い過しであろうか。

このように改めて考えてみると、その当時には思い至ることのできなかつた理解へつながる体験をす

ることができる。そして、一旦一つの理解の扉へ手がかけられると、S子が友だちと繰り返し遊んでいた遊び——ままごとの家の中でエプロンをつけたり、スカートを取り替えたりしながらいろいろな役、いろいろな自分になって遊んでいた——についても見えてくること（がありそう）である。こういう理解であるときS子を見守り、S子に接することができたらば何かが変わっていたのではないだろうか。

「感じ取る」から「見直す」へ

この夏のある研究会で、非常に私の心に働きかけてくることばがあった。

それは、参加者である一人の研究者の一言だった。その方は現職の幼稚園教諭による研究発表資



料を示しながら、保育者が一人ひとりの子どもを理解しようとして、子どもの内面に起こっていることに近づこうと試みるとき、「感じ取るところまでではできても、それをさらに見直すというのが難しい」という趣旨のことを発言された。私は、まさしく今自分が抱えている問題を指摘してもらったような気がしてその発言を聞いていた。

保育者として、大勢の子どもたちと共に精一杯の生活を与えられた喜びを感じる日々である。外側からは、喧騒や活気や同じような内容の繰り返しに見える保育の一日一日の中にも、子どもの傍らに共に生活する者にとっては、子どもたちについて、いろいろな感覚が生起し、心を痛めたり、驚いたり、感動に満たされたり、頭を悩ませたりすることの連続である。

へーちゃん、今日は思い切って仲間に入れてもらっていたなへーちゃんは、今日もままごとを一人じ

めして友だちから責められていた。私が間に入るとかえってかたくなになってしまうようだけれど、どうしたものだろうへーは、このごろ決まってジャングリズムのところから大声で私を呼ぶ。今日もなかなか行ってあげられなかったから明日はなるべくすぐ応えてあげられるようにしようへーとの関係は、どうも何かがうまくいってないようだ。二人の間になにが起こっているのだろうかへーの相手を断るときのことばづかいがどうも気になる。クラスの中でもきついことばがときどき聞こえてくるけれど、みんなにどんなふうにかがつかうてもらえるようにしたらいいだろう

保育者である私の頭の中に、たくさんのが同時進行して沸き起こっている。

「一日、保育の現場に出ることは、一冊の本を読むようなものだ。理解しながら読むこともできるし、

わけの分からぬまま読みとばすこともある。この頃の日記より^{*1}

「一日の保育を終えて、何と多くのことをしたかと思う。しかし振り返ってみると、何をしたのか、いちいち思い出せない^{*2}」

ことばに上ってくる以前の、出来事とも言い切れないような、数えきれないくらいたくさんの方に毎日出会っているものの、真剣に生きた時間はあつと言ふ間に過ぎて、実際の肉体的な労働へ駆り立てられながら次の日が続いてやって来てしまう。あの人のこと、この人のこと、気になりながら、考えながら、実際に具体的に次の日の生活の中で意識して目を凝らし、立ち向かえるのは、本当に限られた範囲のことではない。しかし、だからと言ってS子のことの様に、「一体何だったのだろう」「今更気づ

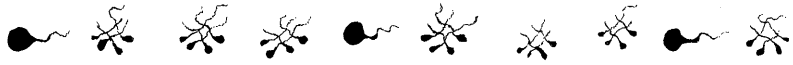
くなんて残念だ」ということを繰り返す訳にもいかない。確かに、そのときは、そのときとして精一杯かもしれない。だが、少しでも私が「子どもたち一人ひとり」を思うのであれば、そんな生活の中でも、立ち止まって振り返り、他者の意見や考えも視野に入れられるコミュニケーションを心がけながら、二度でも三度でも「見直す」ことの必要性和大切さを心から思うのである。

(洗足学園大学附属幼稚園)

*1 津守 真『保育者の地平』（ミネルヴァ書房、一

九九七年）二ページ

*2 前掲書、二一九ページ



保育の本から

『保育者の地平』を読んで

松沢 孝博

来るものを受けることによって大人の世界はひろがる——かなり前に読み終えていたのにもかかわらず、この度の依頼を受けた時に、一番にしかも明瞭に浮かんできたのが本書（津守 真著、ミネルヴァ書房、一九九七年）からの一節である。とはいもの、ほんの一瞬ある種の躊躇が襲ったのである。ところがその躊躇はかつて同じ様な状況における躊躇とは異なっていた。その躊躇は大変小さく、むしろ積極的に受ける思いが生じていたのである。いつもの自分とは異なる思いが、自分の中に生じていることに驚かされ、書き終えた時の自分の広がりを感じつつ進めたいと思ったの

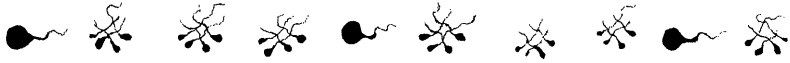


である。それだけでも私の世界は広がったと言えるのかもしれない。

保育の原型を見る

「本書は、どんな子どもでも子どもが遊ぶ保育をするのにはどうしたらよいかという長年抱いてきたことへの答えである」と述べられて始まる。しかしそこには、指導、評価、めあて、躰というようなく目にするこぼが出てこないだけでなく、向こう側に子どもをおいて、大人が望む姿を目指して子どもを引っばっていく様子も見ることとはできない。ただ子どもと出会い、子どもに寄り添ってともに生活していく姿がある。その寄り添うことも、大人がしゃしゃり出るような寄り添いではなく、子どもが必要としていることがわかるからこそ、自然になされる行為なのである。しかも、子どもの行為に奇異な感じがしたり、不可解な感じが生じても見放さないでもちこたえるのである。すると新しいかかわりが開けてくる。子どもを信じていることができるがゆえに、子どもとの間でもちこたえることができるのであろう。私などは、教える意識、躰ける意識が勝り、結果的に当然のことをしたぐらいにしか思わないのではないか。

ところで、象形文字という保育の「保」という文字は、人が子どもを背負っている姿であったり、寄り添って子どもを守っている姿であるともいわれている。著者の子

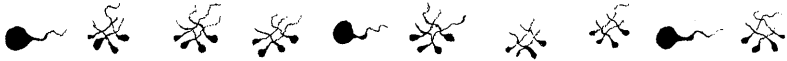


どもに寄り添う姿とダブってしまうが、それは子どもとの空間的距離の問題ではなく、気持ちの距離が近いということであろう。

子どもが、おんぶや大人のそばに居ることを要求する時に、大人が気持ちよくそれに応えようと、子どもは全幅の信頼をよせてそこで過ごす。すると自ら降りるなり、大人から離れて自らの遊びを始めることを多くの場面を通して教えてくれる。確かに、子どもの傍にはいるものの、早く何とか降りたいと考えていたり、上手に子どもから離れる算段を考えていたりすると、むしろ子どもは離れない、自分の遊びを見つけ出すことはできない。

子どもとの響きあい

子どもの小さいな行動にも目を向け、その行動の背後にある子どもの気持ちを感じて応えていく。それに対して子どもの方もある時はことばで、ある時はことば以外のからだの動きで応えてくる。そこでは「今」の充実のために最大の努力がなされる。そしてともに喜びの時を迎える。例えば、画用紙を前にした子どもに自動車や犬を描いて欲しいといわれると、すぐにその形を描いて喜んでもらおうとすることはある。しかし、だからといって子どもはそれほど喜びを表わさないことが多い。子どもは、犬や自動車を動きとして捉えていることが多いので、著者は画用紙に犬を曲線で描

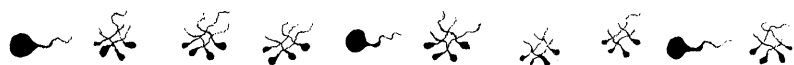


くと、すると、子どもの自らワンワンといいながら紙が破れるまで曲線を描くのである。すると大人と子どもと一緒に喜びの中に入っていく。それがこちらにも伝わってくるのである。

響きあうためには、相手の気持ち（音）を聴かなければならない。自分の気持ち（音）だけを主張していたのなら、騒音になりこそすれ響きあうことはない。それは大人は聴くことができるが、子どもはそれが可能であろうか。今まで私たち大人はそのことに無神経ではなかっただろうか。まして、幼い子ども、ことばをもたない子どもに対してそのようなことはありもしないこととして対応してこなかっただろうか。ほんの小さな表現の中に大きな気持ちが含まれている。それに気づく時に響き合いは可能になるのである。

成長すること

子どもを前にする大人は、大人と子どもとの関係を「成長させる―させられる」という図式で見えてしまい、子どもをいかに他の子どもと同じように成長させるかに奔走し、子どもは一律かつ一方的に成長させられる側に終始することが多い。大人を棚上げにして、子どもにうまくいかないことの原因を帰することは余りにも多く見聞きすることができる。時に子どもから教えられたり、気づくことがあって、うれしいと感

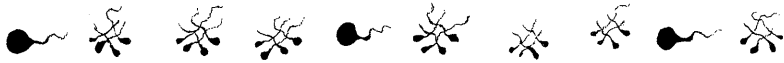


じてもそれはすぐに忘れ去られ、自分が子どもにしてやったことだけを覚えていて、恩に着せたり頑張りを要求したりする。

著者は、「子どもを育てる大人は、子どもと出会い、子どもの表現に応答し、子どもとともに現在をつくり、子どもとの間の体験を省察する。その生活の中で大人は日々学ぶ」と述べている。子どもと出会うからこそ学びであり、大人の成長の糧ともいべきものである。本書から、子どものみならずかわる親、実習生、同僚から学びつつ表現されたものに接する時、自らの傲慢さと学びのかたよりを感じざるをえない。特に大学で教鞭をとるものとして、専門性というみ旗をもってして学生はもちらんのこと、専門の異なる同僚にできえ、自らを上位において相手から学ぶ姿勢を消しさってしまう。かわりあうともどもにとって、成長する機会がいつも身近にあることを、常に留めておきたいものである。

生きた学問に向けて

言語の迷路にはまりこんで日常の具体的な生活に力を持ちえない哲学や、客観性を金科玉条のごとく標ぼうして（もちろん主観主義はよしとしないが）なまの具体的な人間を遠ざけた心理学に接するにつけ、何のための学問であるのかと考えてしまう。すでにある方法論から見えてくることは、主体としての人間、自らの意向で生きる人



間が見えてこない。改めて、保育を考え、「私」が直接子どもとかかわろうと、横で見ようよと、「私」がかかわっているの、「私」を含めた現象の理解が大切であると考えている時、本書はタイムリーに示唆を与えてくれているようである。人間は抽象的に生きているのではなく、生々しい具体性の中で生きているのである。今の哲学や心理学が置いてきてしまったことを本書が教えているようである。子どもとかかわり考えることが、必然的に新たに哲学や心理学を超えたものにならないだろうか。子どもの存在自体が、既成のもので推し量ることのできない未知であり、人間本質に関する無尽蔵かつ豊かなものを持ち合わせているだろうから。

おわりに

はじめに述べた、自分自身の広がりを得られたのであろうか。

一地方の小さな町においても、人間を対象化して、結果的には物と同じように扱うことが余りにも当たり前になってきている中で、無自覚の内にもそれが日常化していくことに抗するために、新たな勇気を得た感じである。子どもが伝えてくれることにはさやかでもよいから敏感さを持って応え、共に喜ぶ実感を重ねたい。

(四国学院大学)

編集後記

今月号から、藤田美美子先生の「子どもの生活と音楽」、楡木満生先生の「子育ての心理」の連載が始まります。子どもとの生活をより楽しいものにする手掛かりになるのではないのでしょうか。

*

四月は入園・入学の月です。新しい環境に入ったわが子の、今まで見たことのない一面に出会い驚かされた経験をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。

Lは、一年保育の幼稚園に入園した直後から大型積み木で遊び始めました。わが子を初めて家庭から幼稚園に送り出した母親にとって、それ

はほほえましい光景に映りました。けれども、それが基地作りであり、一日の遊びのほとんどが、テレビアニメのキャラクターになつての「たたいごっこ」であることを知り、びっくりしてしまいました。

わが家ではそれらの番組を見ていませんでした。それなのに、どうして他の男児と同じようにメンバーになり、そのキャラクターのしぐさをして「たたいごっこ」に興じることができるのでしょうか。どこで得た知識なのでしょうか。Lがそういう遊びが好きだったとは……。

その後になつて、ときどき祖母に買ってもらう幼児向け月刊雑誌のあちこちに出ているのがその断片であり、それらの本をぼろぼろになるほど読んでいたことを思い出し、Lが以前から興味をもっていたことが、私にもわかりました。

(A)

幼児の教育

第九十七巻 第四号

(一九九八年四月号)
定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十年四月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二丁目

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三三五三九五六一六六一三(営業)

☎〇三三五三九五六一六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

なんでも「手づくり」してしまう先生たちに贈る新シリーズ!!

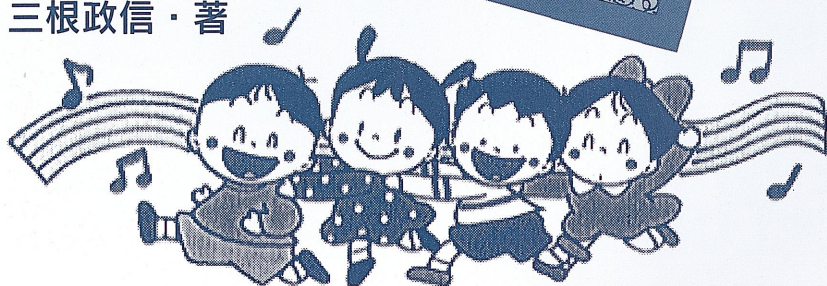
手づくり保育シリーズ⑫
あそびうたオンパレード

乳児から幼児まで、
どこでも簡単にできる
著者オリジナルの
あそびうた集。
うたうこと、動くこと、
表現すること、
人の思いを
受けとめること、
音楽すること、
これが
あそびうたです。
遊びの
バリエーションを
イラスト入りで
多数紹介。

◆好評発売中



三根政信・著



B 5 判・96頁・定価：本体2,200円＋税

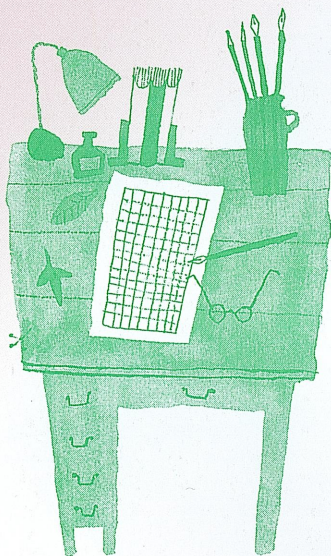
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育 第九十七巻 第四号 平成十年四月一日(毎月一回)発行(昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可)

倉橋惣三 保育へのロマン

荒井 洌・著

「倉橋は決して古くない」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、明日の保育現場で使えるように、分かりやすく的確に倉橋理論を解説します。



A5判・220頁・定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレール館

定価 五五〇円(本体五二四円)☆

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。